

森の音楽隊

ねらい ○ みんなで気持ちや力を合わせることの大切さに気づく。

○ お年寄りを思いやる気持ちをもつ。

たいこをたたくのがとくいな、たぬきのポンタ君。

ピアノの好きなうさぎのミミちゃん。

フルーツが好きな小鳥のピピ君。

今日も森の中で音楽隊の練習をしています。

その様子を木のかげからそっと見ている、きつねのコン君。

「楽しそうだな。一緒にしてみたいな。」

と、うらやましそう。

それに気づいたポンタ君。

「コン君、一緒にどう？」

「えっ。ぼく、無理だよ。何もできないし。」

「この間、歌をうたっていただろう。聞いたよ。」

「あんまりじょうずじゃないよ。」

「いいんだよ。一緒に歌おう。なかまが増えるとうれしいもん。」

こうして、コン君もなかまに
入ることになりました。

そんなある日、みんなで音楽
隊の練習をしている時です。

くまのおばあさんが、切りか
ぶにすわって何やら困った顔



をしています。

気がついたポンタ君が、おばあさんに声をかけました。

「おばあさん、どうしたのですか？」

「実はね、足をけがしてしまったの。」

「じゃあ、ぼくたちで家まで送りますよ。」

と、ポンタ君。

「あっちに大きな荷車があったから、とってくるよ。」

と、はりきるコン君。

「ぼくたちも行こう。」

と、ピピ君とミミちゃん。

こうして、おばあさんを乗せてみんなで送ることにしました。

荷車を押しているうちに、最初はりきっていたコン君は、だんだん疲れてきて手がいたくなり、押すのをやめてしまいました。

それに気づいたくまのおばあさんが、声をかけました。

「みんな、悪いね。もういいよ。」

「大丈夫ですよ。ぼくたちにまかせてください。」

「なあ、コン君も一緒にがんばろうな。」

ポンタ君、ピピ君、ミミちゃんが言いました。でも、

「だめだ、もう手に力が入らないよ。」

と、コン君はその場にすわり込んでしまいました。

「じゃあコン君、あとからおいでよ。」

みんなはそういうと、先に進むことにしました。



すわり込んだものの、みんなのことが気になるコン君。

いっしょうけんめい荷車を押しているみんなの姿を見て、自分だけがこうしてるのが、だんだんはずかしくなってきました。

「…やっぱりみんなを手伝おう。」

コン君は立ち上がってみんなの所へ行きました。

「あっ、コン君大丈夫？」

「やっぱり、コン君がいないと大変だよ。」

「戻ってきてくれてありがとう。」

「ごめんよ。ぼく、途中でやめてしまって。」

こうしてまた、みんな一緒に荷車を押しました。

いつのまにか、コン君は歌を口ずさんでいました。

♪ みんなでいると たのしいな みんなでいると うれしいな
ラン ラン ところが あたたかい なんでもできるよエイエイオー！ ♪



おばあさんの家は、たくさんのおばあさんやおじいさんたちが一緒に住んでいる『ポカポカ園』というところでした。

「ありがとう、みんなのおかげで助かったよ。コン君、よかったらさっきの歌をもう一度、歌ってくれないかい？」

くまのおばあさんは、頼みました。

「歌ってよ、コン君！」

みんなも声をかけました。

「ええ、ぼくが。」

コン君はちょっとはずかしそう。

でも、おばあさんたちのために、はりきって歌うことにしました。

「これから、森の音楽隊の演そうをはじめます！」

コン君の歌にあわせて、楽しそうに演そうがはじまりました。

おばあさんやおじいさんたちは、にこにこ笑顔。

「すてきな演そうをありがとう。心がポカポカしてきたよ！」

「これからも来てくれるかい？」

みんなはうれしくなり、これからも時々、『ポカポカ園』へ行くことに決めました。

今日も、森の中には明るい歌声と笑い声がひびきわたっています。

♪ みんなでいると たのしいな みんなでいると うれしいな
ラン ラン ころろが あたたかい なんでもできるよ エイエイオー！ ♪

